

セネカ

Ⅱ

悲劇集 1

小川正廣・高橋宏幸
大西英文・小林 標 訳



悲劇

セネカ

集

江苏工业学院图书馆
藏书章

西洋古典叢書

セネカ悲劇集 1 西洋古典叢書 第1期第2回配本

一九九七年七月二十五日 初版第一刷発行

訳者

小川 正 廣
高橋 宏 幸
大西 英 文
小林 標

発行者 尾崎 芳治

発行所 京都大学学術出版会

606-01 京都市左京区吉田本町 京都大学構内

電話 〇七五・七六一・六一八二

FAX 〇七五・七六一・六一九〇

印刷・土山印刷／製本・兼文堂

© M. Ogawa, H. Takahashi, H. Ohnishi, K. Kobayashi
1997, Printed in Japan. ISBN4-87698-102-7

定価はカバーに表示しております

凡 例

- 一、本集はルキウス・アンナエウス・セネカの作として伝わる悲劇の全訳である。
- 二、翻訳にあたっては、ツヴィアラインの校訂本 (O. Zwielen, *Lucii Annaei Senecae Tragodiae*, Oxford, 1986) を底本として用い、これと異なる読みをした箇所は脚註もしくは補註によって適宜示した。
- 三、テキストにおける校訂記号——削除記号「~~」~~、挿入記号「[^]」——は訳文では再現せず、それについて説明が必要な場合は註に記した。
- 四、訳文中の括弧「[^]」は訳者による文意の補足を示す。
- 五、訳註は原文の理解に資するものにとどめ、訳文中に(1)、(2)、(3)で示して脚註とした。また、やむをえず長くなる註については「補註」として巻末に記した。ただし、訳文中には補註の特別の記号は付さず、脚註で(補註A参照)のごとくに示した。
- 六、固有名詞は原則として「オエディプス」、「ヘルクレス」のごとくラテン語形で統一した。ただし、「ギリシア」(グラエキア)、「フェニキア」(ポエニキア)など、慣例に従った場合もある。なお、「固有名詞ラテン語・ギリシア語表記対照表」を巻末に付した。
- 七、ラテン語固有名詞のカナ表記は次の原則に従った。
 - (1) ph, th, ch は p, t, c と同音に扱う (Phaedra パエドラ、Thyestes テュエステスなど)。
 - (2) cc, pp, ss, tt は「ッ」で表わす (Bachus バックス、Hippolytus ヒッポリュトウスなど)。ただし、ll, tt は「ッ」を省く (Applo アポロ、Phryrus フリュルスなど)。
 - (3) 音引きはしない (メーデア・アテナーアテナエなど)。ただし、慣例や語感などを考慮してこれに従わない場合もある (テーバエ、ユノーなど)。
- 八、訳文欄外下部の漢数字は行番号を示す。ただし、翻訳という性格上、原文行との厳密な対応は期し難く、あくまでもこれは目安である。

目次

狂えるヘルクレス……………	(小川正廣 訳) ……	3
トロイアの女たち……………	(高橋宏幸 訳) ……	99
フェニキアの女たち……………	(大西英文 訳) ……	185
メデア……………	(小林 標 訳) ……	243
パエドラ……………	(大西英文 訳) ……	323

補 註

424

作品解説

狂えるヘルクレス (428) トロイアの女たち (434)

フェニキアの女たち (442) メデア (448) バエドラ (455)

固有名詞ラテン語・ギリシア語表記対照表

461

セネカ 悲劇集 2 収録作品

オエディプス

アガメムノン

テュエステス

オエタ山上のヘルクレス

オクタウイア

セネカ

悲劇集

1

狂えるヘルクレス

小川正廣
訳

登場人物

ユノー 女神、ユピテル（ゼウス）の妹であり妻（ギリシア名ヘラ）。

アンピトリュオン ヘルクレスの養父。

メガラ ヘルクレスの妻。

リュクス テーバエの王位の篡奪者。さんだつ

ヘルクレス ユピテルとアルクメネ（アンピトリュオンの妻）の子。

テセウス ヘルクレスの友人でアテナエ王。

合唱隊 テーバエの人々。

ヘルクレスの息子たち

リュクスの部下たち

場所

テーバエのヘルクレスの館の前。

(時刻は夜明け前)

ユノー (独白)

雷鳴の神の妹——まことにこれがわたしに残された

唯一の身分。浮氣のたえぬユピテルのため、

寡婦^{やもめ}同然のこのわたしは、もう夫も高天の聖なる住居も捨て去った。

天界から追ひ払われて、場所は情婦どもに譲つてやった。

大地こそわが住みかだ。⁽¹⁾ 天空は情婦らが占領している。

見よ、あれはアルクトス。⁽¹⁾ 凍てつく北天の極のはるかな高みから、

ひとときわ聳える星座となつてアルゴス人の船隊を導いている。

そちらの方——早春の息吹に日も長く延びるあたりに

輝いているのは、海を越えてテュルスの女エウロパを運んだ星座⁽²⁾。

あちらの方では、船と海に恐怖をもたらす光の群れを、

諸方さまようアトラスの娘たち⁽³⁾が出現させている。

こちらで剣を振り上げて、神々を威嚇しているのはオリオンだ。

二

(1) 大熊座。ユピテルに愛されたカリストが熊に変身したのち、この星座になった。

(2) 牡牛座。エウロパを恋したユピテルが変身した牡牛。牛は彼女をクレタ島に運んだ。

(3) アトラスの七人の娘(プレイアデス)のうち、三人がユピテルと交わった。七人の娘らは風雨の季節を告げる星(すばる星団)になった。

金色のペルセウスも、星の姿で現われている。

あちらに燦然と輝いているのは、テュンダレウスの双子の星座と、

その生誕のとき、漂う大地も動かなくなったという神々の天体。

そもそもバックスだけが、あるいはバックスの母親だけが、

天上に到達したのではなかった。侮辱を受けぬ場所がどこにもないよう

にと、

天界はクノッススの娘の花冠さえ戴いている。

しかしこんな嘆きの種は昔のこと。ただ、テーバエの国だけは

野蠻で恐ろしい。不敬な若い女に満ち溢れたこの国ひとつが、

幾たびわたしを継母にしたことか！　だが、たとえアルクメネが

空に昇って勝ち誇り、わたしの居場所をわがものにしようとも、そして

彼女の息子も同様に、約束された天の座を占めることになろうとも、

——この子の誕生のために天界は、まる一日を犠牲にし、

太陽神はまばゆい光線を大洋に沈めておくよう命じられて、

東の海に遅い朝の輝きを放ったのだ——

わたしの憎しみはそのままでは消えぬであろう。この荒々しい情念が

執拗に怒りを燃やし続け、激しい心の痛みは、

二

(1) 黄金の雨に身を変じたユピテルとダナエとの間に生まれた英雄。

(2) テュンダレウスの妻レダはユピテルと交わって、カストルとポルクスという双子の男子(ディオスクリ)を生んだ。

(3) アポロ(太陽)とディアナ(月)のこと。この二神はユピテルとラトナから生まれた双子で、その出産の地デロスは、それ以前は海に浮かぶ島であった。

(4) セメレ。ユピテルに愛されてバックス(ギリシア名ディオニュソス)を生んだ。

(5) クレタの王ミノスの娘アリアドナ。バックスが彼女を妻とし、結婚の贈り物として与えた花輪を冠座の星に変えた。

(6) ユピテルと交わったテーバエの女たちは、ヘルクレスの母アルクメネの他、バックスの母

平和を奪つて果てしない戦争を起こすであらう。

ではどんな戦争を？ 敵意に燃えた大地が創り出す身の毛もよだつ

怪物、海や空が生んだ不気味で恐ろしく、

有害で、残虐で、狂暴な化け物——何であれ、

皆打ち碎かれて屈伏した。あいつは災難を克服し、ますます逞しくなっ

ていく。

わたしの怒りを楽しんでいるのだ。わたしの憎悪を

自分の名声に変えてしまうのだ。わたしはあまりに苛酷な仕事を命じて、

かえってあいつの父方の血筋を証明し、栄光の機会を作ってきた。

太陽が昼の光を連れ戻すあたりと、それを沈めるあたり、つまり

松明の炎を近づけて、二つのアエティオピアの種族を焦がすあたりで

さえ、

彼の不敗の武勇は崇められ、世界中であいつのことは、

まるで神のように語られている。もうわたしには怪物の蓄えはない。

ヘルクレスにとって命令を成し遂げるのは、わたしが命令を下すことよ

り

たやすい仕事なのだ。嬉々として、あいつは指令を受け入れる。

三

セメレ、アンピオンとゼトウスの母アンティオペ。

(7) ヘルクレスは難業を完遂したのち不死になると言われていた。

(8) ユピテルはアンピトリュオンの留守中にその妻アルクメネを訪れ、夜の長さを二倍(一説には三倍)にして彼女と交わった。その結果ヘルクレスが生まれた。

(9) ヘルクレスが神々の王ユピテルの息子であること。

(10) アエティオピアとは元来「顔の焼けた人々の国」を意味し、古代では東(インドあたり)と西(北アフリカ)に存在すると考えられていた。

四

かの暴君⁽¹⁾のどんな非情な命令が、あの猛々しい若者を

痛めつけることができたろう？ 彼が武器がわりに身につけているのは、

恐怖にもめげず打ち倒したものではないか。獅子と水蛇で武装して、

あの男はやつて来る。陸地はもう、あいつを満足させるほど広くはない。

見よ、彼は冥界のユピテルの扉を打ち壊し、

敗れた王から奪った戦利品⁽⁴⁾を地上に持ち帰っている。

冥府から戻ることなど何でもない。亡霊の国の掟さえもなくしてしまっ

た。

わたしはこの眼でじかに見た、そう、あの男が地獄の闇を追い払って、

冥王を負かしたあと、父親⁽³⁾にその弟神からの略奪品を誇らしげに

見せびらかしているのを。籤⁽⁵⁾によってユピテルと対等の地位を得た神

さえも、

あいつは鎖で縛って重荷を負わせ、引きずり回さぬとどうして言えよう。

エレブス⁽⁶⁾を取り抑えて、その主人にならぬとは？ 見よ、彼はステュク

ス川⁽⁷⁾を暴^{あは}いている。

地底の死霊のもとから引き返す道が切り開かれた。

恐ろしい死の神秘さえも、白日の下に曝^{さら}された。

吾

(1) ミュケナエの王エウリュース

テウス。ヘルクレスを敵視し、さまざまな難題を課した。それがのちに十二の難業と呼ばれる。

(2) ヘルクレスは退治したネメアの獅子の毛皮を身につけ、レルナの水蛇(ピュドラ)の血に

浸した毒矢を持っている。

(3) ユピテルの兄弟神デイス(ブルト)の別名、ギリシア名ハデス)。籤⁽⁵⁾で地下の国の支配権を得た。

(4) 冥府の番大ケルベルスを指す。六〇行註参照。

(5) ユピテルのこと。

(6) 冥界の暗黒の神。

(7) 冥界の川。

そしてあの男は、亡霊どもの牢獄を押し破って氣勢を揚げ、わたしに対して勝ち誇りながら、傲慢な腕で

黒い犬を引き連れて、アルゴス人の町々を巡っている。

ケルベルス⁽⁸⁾を見たとき、陽の光は揺らめき、

太陽が恐れおののくさまをわたしは見た。わたし自身も震えに襲われ、屈従した怪物の三つ首をまじまじと見つめながら、

自分の命令が恐ろしくなった。だが、そんな嘆きはあまりにつまらぬこと。

天上のためにこそ、恐れるべきなのだ。最も下の王国を征服した男が、最も上の王国を占領しはしまいか、——父親から王権を奪い取りはしまいかと。

あの男は、バックスのようにのんびりと旅をしながら天上にやって来はしまい。

あいつは廢墟の中に道を求め、天界からすべてを追い払って支配することを望むだろう。腕力が証明されて思い上がっているのだ。

天界がおのれの力で征服されうると、

彼は耐えることによって学んだ。天球の下に頭を置いても、

六〇

(8) 冥府の入り口の番犬。三頭で尾は蛇の形、頸の周囲に無数の蛇の頭が生えている怪物。

七〇

その途轍もなく大きな塊に持ちこたえる苦しみで、彼の両肩がたわむことはなかった。

むしろ天は、ヘルクレスの頸の上で以前よりもしっかりと支えられた⁽¹⁾。

不動のうなじは、星々と空の重みと、上から抑えつけようとすると

このわたしの力に耐えた。彼は天上に至る道を探し求めている。

さあ、行け、わが怒りよ、突き進め。大それた考えをめぐらす男を押し潰せ。

おまえ自身が敵に迫り、みずからの手で引き裂いてしまえ。

これほど深い憎しみを、なぜ他人に任せるのか。野獣どもは立ち去らせよ。

命令するのに疲れ果てたあのエウリュステウス⁽³⁾も休んでおれ。

ティタンどもを解き放て、不遜にもユピテルの権勢を覆さんとした

かのティタンどもを。シキリア島の山嶺⁽⁵⁾の洞穴を開けるのだ。

巨人が身を揺るたびに震動するそのドーリス人の土地は、

地下に閉じ込めた不気味な怪物の頸のいましめを緩めねばならぬ。

天高く昇る月には、新たな野獣を孕ませよ⁽⁷⁾。いや、その程度のもの

ならば、

六

(1) アトラスが天球を支えていたときを指す。

(2) 底本とは異なる写本の読み (melusque) を採る。

(3) 四三行註参照。

(4) ティタン神族はユピテルらオリュンブスの神々と戦い、敗れて地下に閉じ込められた。ここでは、同じくオリュンブス神族と戦った巨人族と混同されている。

(5) アエトナ山 (火山)。

(6) 巨人エンケラドウス、あるいはテュポエウス。

(7) ネメアの獅子などの怪物が月から来たという伝承があった。

彼はすでに打ち負かした。ではアルケウスの孫⁽⁸⁾と対等の者を探してみるか。

いや、それは本人以外の誰でもない。もうあの男には、自分を相手に戦わせよう。

タルタルスの奈落の底から、復讐の女神たち⁽⁹⁾を呼び覚まし、

ここにやって来させよう。彼女らの燃えさかる頭髮は炎をまき散らし、その残忍な手は毒蛇の鞭を打ち鳴らすがい。

さあ、行け、傲慢な男よ。天上の神々の住まいを目指し、

人間の世界を軽蔑せよ。今やおまえは尊大にも、ステュクス川と死霊たちから

逃げおおせたと信じているのか。この地上でも、地獄をおまえに見せてやろう。

罪を犯した死霊どもの流刑地のはるか下、深い闇の中に隠れている不和の女神をわたしは呼び戻そう。

その女神は、山塊に塞がれた巨大な洞穴によって守られているのだ。

冥王の領土の最も深いところから、残りのものは何でも連れ出して、引っぱりだしてみせてやる。さあ、やって来るだろう、憎むべき「犯

(8) ヘルクレスのこと。アルケウスは彼の養父アンピトリュオンの父。

(9) 冥界の最も下の部分。

(10) エウメニデス。